石川県における玉の生産と交流
－弥生時代を中心に－

久田　正弘（調査第２課）

１．県内の玉の生産

石川県の弥生時代中・後期の遺跡では、玉生産遺物の出土が一般的であるが、遺跡間や同じ遺跡内でも場所によっては出土量の差が確認される。県内では大きく数箇所の集中区が確認される。南加賀地方では加賀市猫橋遺跡周辺（A地区）と小松市八日市地方遺跡～梯川（かけはしがわ）流域（B地区）、北加賀地方では松任市内沿岸部（C地区）と金沢市内沿岸部（D地区）、能登地方では羽咋市周辺（E地区）と七尾市周辺（F地区）と富来町周辺（G地区）に集中する。

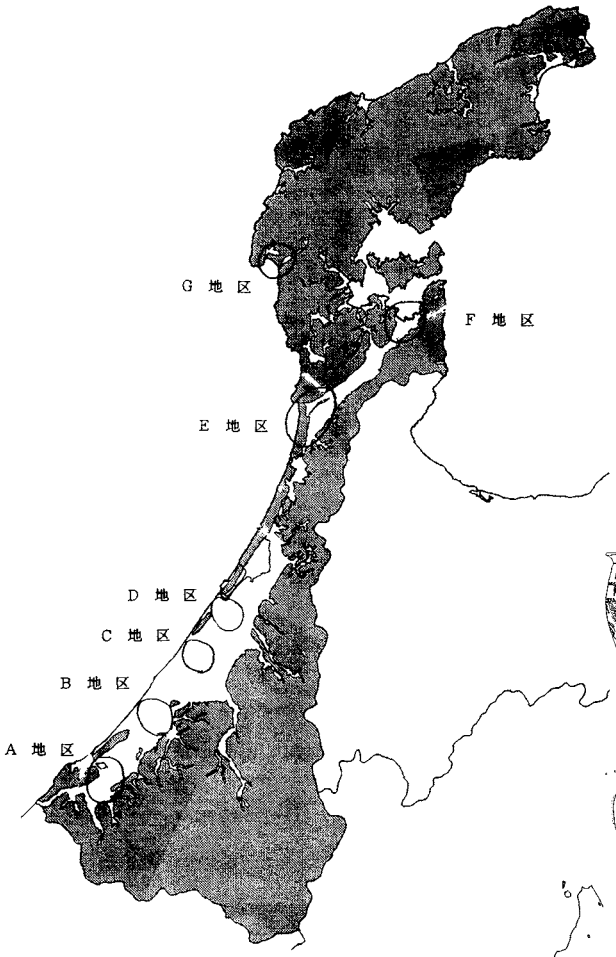
弥生時代Ⅱ期にB地区八日市地方遺跡とD地区矢木ジワリ遺跡で開始され、Ⅲ期前半になると八日市地方遺跡の生産規模は大きくなり、A地区猫橋遺跡やC地区野本遺跡でも生産が開始される。Ⅳ期（専光寺・戸水B式）では遺跡の数が少ないので不明である。中期は施溝分割技法で行われ、後期には施溝分割技法は行われなくなり、鉄器による打割技法に変化する。Ⅴ期前半のC地区八田小鮒遺跡では輝石安山岩製の石針未製品があるが、乾遺跡（Ⅴ期後半）には鉄製錐が存在する。Ⅴ期前半のB地区一針B遺跡竪穴住居から椀形滓と青銅器鋳造鋳型が出土しており、玉素材の打割痕跡でも鉄器の使用が確認される。またE地区東的場タケノハナ遺跡では、施溝分割技法の角柱体に鉄器による打割痕跡が見られる例があり、その所属時期が問題である。

緑色凝灰岩は、管玉が基本であるが、野本遺跡などでは角玉も若干みられる。後期になると一針B遺跡や塚崎遺跡では管玉の超大型品があり、管玉以外の可能性が指摘されている。古墳時代前期では多くの地区で腕飾類を生産している。管玉は緑色凝灰岩製が殆どであるが、能登地方E～G地区では鉄石英製管玉の生産が若干認められ、山王丸山遺跡や細口源田山遺跡では墳墓から出土している。加賀地方のA・C地区でも微量生産が確認される。

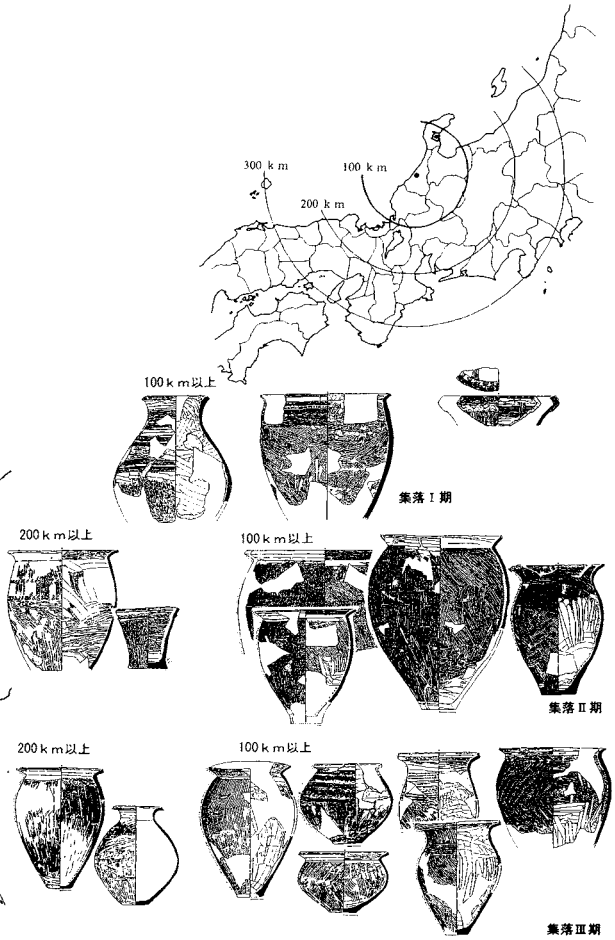
２．地域間交流について

石川県内の管玉生産は、地区内や県内での消費を目的にしたものではなく、県外に出すことが主体であったと思われる。それは石川県内の遺跡では、各方面から搬入ないし模倣された土器が多く確認されることから想定される。外来系土器は東北南部系、信州系、東海系、近江系、近畿系、西日本系などが確認され、小松市八日市地方遺跡では広範囲の土器群がまとまって出土している例として有名である。最近生駒西麓産の壺が、E地区と富山県氷見市で確認されているなど新たな発見もある。北陸系土器は、大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡（緑色凝灰岩と鉄石英出土）、東大阪市瓜生堂遺跡、東京都文京区小石川遺跡などで出土例があるが、多くはない。

外来系の人々は、玉類との交換材を石川県にもたらしたものと思われ、石器・青銅器・鉄器などが確認される。長野県榎田遺跡周辺で生産された緑色岩類製石斧はA・B・D・E地区で14点出土しており、太平洋側のみならず日本海側にも広域流通していたようである。外来系の石材では、結晶片岩、ナヌカイト、下呂石、黒色粘板岩・頁岩などが確認される。また分銅形土製品は、A～E地区で８遺跡27個体以上出土している。青銅器はB・D・E地区において土製鋳型による生産遺物が確認され、鉄器の加工はB・F区で確認される。また鳥取県青谷上寺地遺跡出土木製高坏の類例が石川県では３例出土しており、搬入品の可能性を指摘した。しかし、地元品との意見も多くあり、検討課題として大きな問題が存在するが、しかしこの木製高坏は、山陰地方との交流を窺わせるものである。

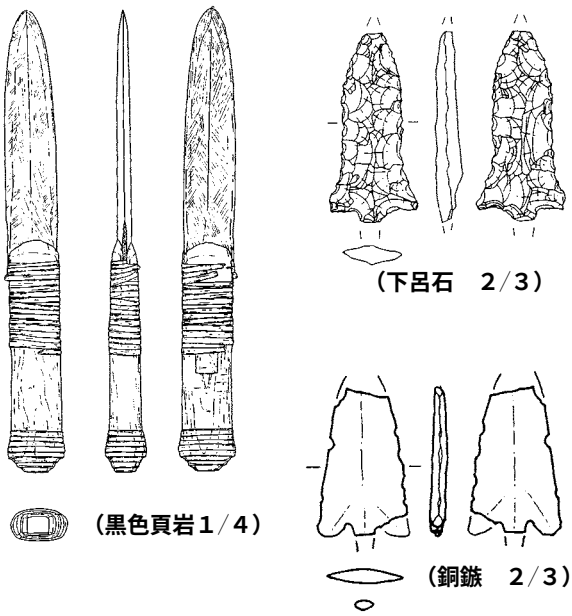


玉生産集中地区



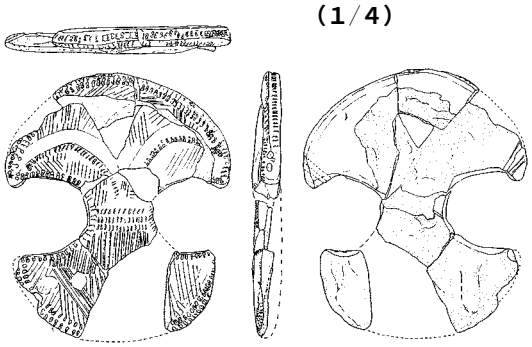
八日市地方遺跡の外来系土器

碧玉製管玉の製作地と製品の分布（S＝1／200万）

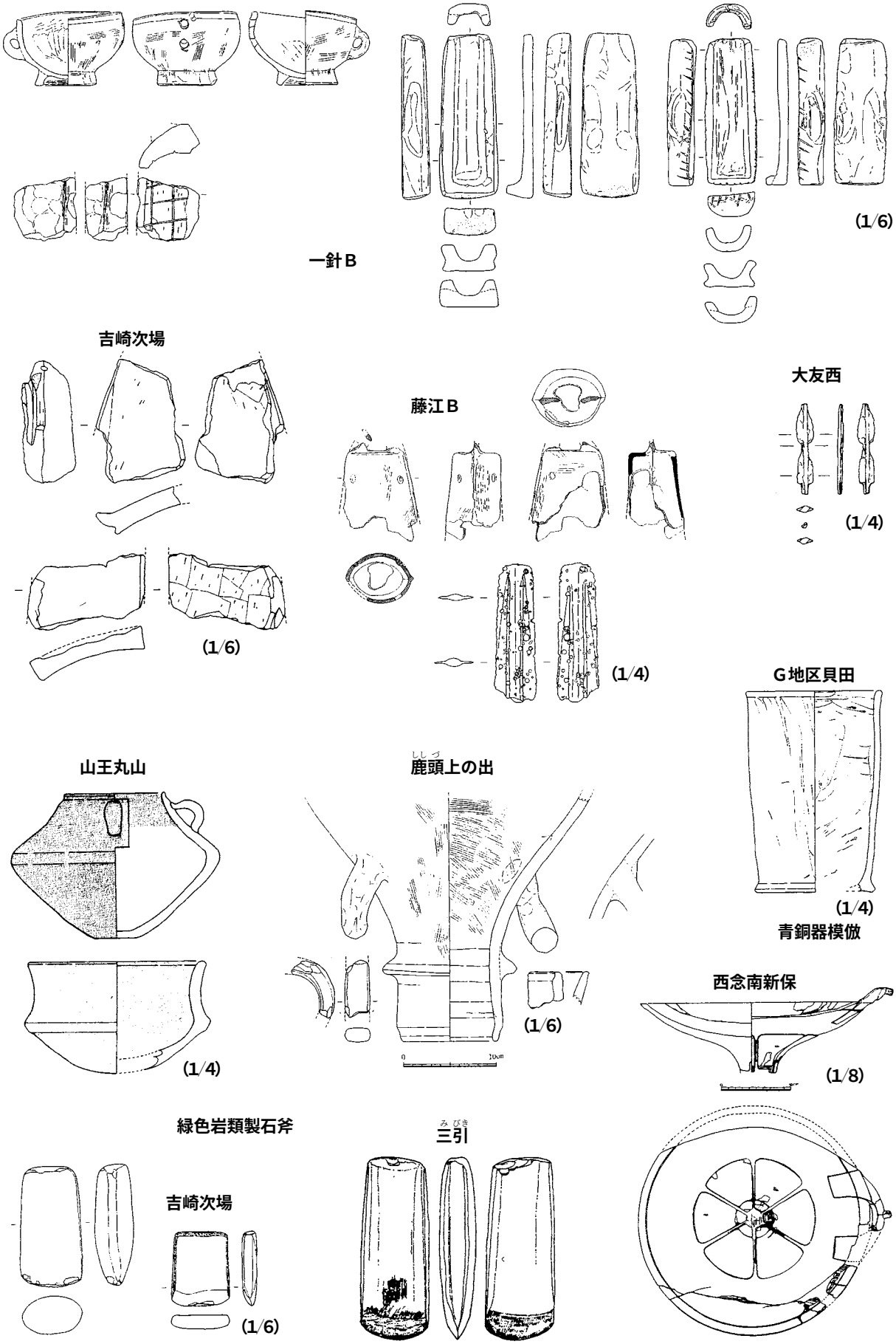


八日市地方遺跡の外来系遺物

（1/4）



第1図　玉生産と交流



第２図　石川県内の外来系遺物